



特別対談

有限会社エコ・ライス新潟 × 東京都葛飾福祉工場

代表取締役 豊永 有

※敬称略

被災地には透析患者も 食物アレルギーの方も絶対にあります。 無駄足になってもいいから 「はんぶん米」を持って行くことを決めました。

葛飾 本日は、お時間をいただきありがとうございます。早いもので、御社とのお付き合いは今年で10年となりますね。

豊永 「はんぶん米」を初めて新潟県外の行政に納入したのが東京都摩市役所で、その時からのお付き合いになります。

食のバリアフリーを広めたい!

葛飾 「高齢化社会」にあった備蓄が必要! と訴えておられます。それについてお聞かせください。

豊永 私自身も新潟中越地震で避難した時に、避難所に行ったら老人がたくさんいてビックリしました。寝たきりの人は外を歩くことがなくなります。またそこで知ったのは、アレルギーとか透析とか咀嚼困難な人がたくさんいるということです。これからの日本社会は高齢化で、食べられない人が増えてくるということを実感しました。

葛飾 新潟中越大地震の被災者であると同時に、一方で支援にも向かわれました。そこから学んだことは?

豊永 新潟中越地震は中山間地域の地震で、「避難所に行かないで、もうここで死んでもいい」と言うご老人たちがたくさんいました。そういう方々をケアしなければいけないのに、そういう視点が自治体には全くないということに気が付きました。それでは自分たちには何ができるか? 自分たちは農家の団体なので、そういう方々が食べられる物を作ろうというきっかけとなる体験でした。

被災地だからできる災害食・日常食を開発します

葛飾 「はんぶん米」の商品開発の歴史を教えてください。

豊永 当社には慢性腎炎を患っている従業員がいました。新潟県中越地震の避難生活できちんとした食事制限ができず、体調が悪化して半年後に人工透析になりました。透析になると患者のQOL(生活の質)が低下し、医療費は一人当たり年間約550万円かかり、約32万人の患者で国庫負担は年間約2兆円といわれています。災害時に体調を悪化させないことが国の財政の為にも重要です。

同じころ、NPO法人東京腎臓病協議会(人工透析患者約7,000名が



有限会社エコ・ライス新潟 豊永 有

会員:以下「東腎協」)から新形質米「春陽」(低グルテン米)を災害用に加工できないかと相談を受けました。平成18年度の公益財団法人にいがた産業創造機構の、ものづくり支援事業の支援を受けて、無添加でカリウム・リンを低減させる製法を開発しました(特許2件取得)。平成19年には、長岡市フロンティア開発事業の支援を受けて、アルファー化するため

の乾燥機を試作しました。

新潟発!災害時の食の安心・安全を! 「はんぶん米」

葛飾 東京の透析患者団体と災害支援協定を締結されたとのことですが。

豊永 当社では、平成12年より新形質米「春陽」を栽培していました。この新しいお米は農林水産省の「スーパーライス計画」から誕生し、人が消化吸収できるグルテンが、通常のお米の半分という特徴があります。新潟県生まれの新しい可能性を秘めたお米です。このお米の普及を目指し、東腎協と連携して活動を開始したときに、新潟県中越地震が発生しました。

腎臓病患者には、被災すると「人工透析が受けられるのか」「制限食が食べられるのか」など、生命に直結する重大な問題が押し掛かります。東腎協と当社で地域を越えて、災害支援協定を締結し、患者自らが災害に備え備蓄する「自助」、東京が被災したときに新潟から支援する「共助」の活動を開始しました。

葛飾 東京都にバリアフリーな災害食備蓄の陳情に行かれたそうですが。

豊永 「自助」「共助」に続き、「公助」として、東腎協とともに東京都福祉保健局に「タンパク制限者疾病患者の災害備蓄に関する陳情」

を行い、都内在住の約27,000人の透析患者、周辺県から流入する透析患者の「食の安全」の確保を訴えました。平成18年3月に東腎協と災害支援協定を締結し、6月に東京都へ陳情。その後、災害時における人工透析患者の災害食の問題は、東京都議会厚生委員会に取上げられました。

頻発する地震災害を受けて東京都が被災想定の見直しなどもあり、バリアフリーな備蓄が実現することができました。陳情から約2年で、東京都という巨大組織が備蓄に動かれたのは、かなりスピード感がありました。

「はんぶん米」の役割・社会的評価と今後

葛飾 あらためて、はんぶん米の役割とは何でしょうか？

豊永 行政と患者、そして、農業者を含めた食品事業者の意識改革だと考えます。新潟県中越地震は大変不幸な出来事でしたが、ただそれを嘆いているだけではなく、同じことを繰り返さない。具体的には、あの時にたんぱく制限者やアレルギー患者が苦しんだのであれば、次の震災の時には、苦しまないよう、メーカーとしても対応しなければならない。行政の備蓄は「量」から「質」に転換しなければなりません。市民は、自分の命は自分自身で守ることを意識しなければなりません。食品事業者である当社は、地域の特産品、技術、コラボによってバリアフリーな災害非常食「はんぶん米」を完成させました。災害大国への減災・防災の意識改革につながる、パイロット的な役割を果たし始めています。

葛飾 はんぶん米の社会的評価はいかがですか？

豊永 当初の行政は「透析患者だけ特別扱いできない」「質よりも量の確保が先」等の反応でした。しかし、東日本大震災で「質」の問題に気が付く行政が増えました。現在では、150以上の自治体で「はんぶん米」が備蓄されています。現在、東腎協の他に2市・1町と災害支援協定を締結していますが、新たな協定の締結を希望されている行政が複数あります。

又、東腎協の上部団体である全国腎臓病協議会、農水省、熊本県から感謝状を頂戴し、農水省が主管するフードアクションニッポンアワード2011で「研究開発・新技術部門優秀賞」、IDSニイガタデザインコンペティションで大賞を受賞しました。

葛飾 被災地支援に行かれています。被災地支援に行く心構えや心境をお話してください。

豊永 中越地震の時もそうだったのですが、東日本でも熊本でも被災地には透析患者も食物アレルギーの方も絶対にあります。でも大混乱の中で、そういった方たちが自分たちで声を上げられるということではできないのです。私たちは空振りになっても、そこへ食べられない人たちへ持っていくことをしなければ、はんぶん米を開発した意味がありません。たとえ無駄足になってもいいから、私たちははんぶん米を持って行くことを決めました。しかし東日本大震災の時は、あまりにも範囲が広すぎて、透析患者やアレルギー患者をなかなか見つけることができませんでした。その反省から、

熊本地震では、新潟から熊本へ向かう途中で、SNSで「アレルギー患者はどこにいるか?」と発信したら、たくさんの情報が入ってきたので、タイムリーに患者のもとへ届けることができました。

東京都葛飾福祉工場への期待

葛飾 東京都葛飾福祉工場へ期待することをお聞かせください。

豊永 超高齢化社会が目前に迫る中で自然災害が多発しています。東京都葛飾福祉工場様の障がい者との共生、そして、バリアフリーへの配慮が、必ずや超高齢化社会・食事制限者等の要配慮者のケアに活かされると思います。

米の生産者団体として、ただ、米を栽培するだけではなく、激変する社会のニーズに合わせた作物の栽培。それを原料にした災害用非常食の開発で東京都葛飾福祉工場様とコラボできれば、バリアフリーな社会実現の一歩となると思います。

葛飾 これからの社会は、共に働き・共に生きる社会、そして多様性を認め合う社会を作っていくことが大きなテーマとして問われると思います。東京都葛飾福祉工場が、福祉の視点を持ちながら災害備蓄を推進していくことは、まさしく使命だと考えております。まだまだ道半ばではありますが、少しでも前に進めることができると思います。今後も啓発活動を進めることによって、こういった視点の理解を広げ、エコ・ライス新潟様と共に、社会に必要なものを供給していきたいと思っております。本日はありがとうございました。

